



バッハの森通信

第 141 号
2018 年
10 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9

<http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699

e-mail: info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森



ボランティア

バッハの森の理念

自主的に・善意をもって・楽しく

異常に暑い夏でした。その上、異常気象が豪雨や猛烈な台風を引き起こし、更に北海道は大地震に見舞われました。これらの天災により被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。しかし天災の報道があるたびに、心温まるニュースもありました。それは、多くの方々がボランティアとして被災地に駆けつけ、被災者の皆さんを助けて、炎天下の復興活動に参加なさっている姿でした。

なかでも、2歳の男の子が自宅近くの山林に迷い込み、大がかりな捜索にもかかわらず見つからないまま数日たち、果たして生存しているかどうか皆が心配し始めたとき、遠方から駆けつけたボランティアの達人が、到着するや数時間で男の子を見つけ出した事件は忘れられません。勿論、何よりも男の子が無事だったことにホッとしましたが、この子探しの達人が、昔、魚屋さんをしていたが、今はボランティア一筋の70代の方と知り本当に感心しました。幼い命が救われたことに涙すると、感謝からも賞賛からも逃れるように、次の被災地に向かったと伝えられました。見事なボランティアぶりです。

* * *

一般に「ボランティア」は「公共の福祉のために自主的に無報酬で活動する人」と理解されていますが、その元になった英語「ヴォランティア」(volunteer)のさらに元のラテン語「ヴォルンタス」(voluntas)は、より広い意味で「自主的に喜んで行動すること」を意味しています。

この言葉には興味深い用法があります。それは、バッハの森で、バッハのカンタータと共によく歌うラテン語のミサ曲の「グローリア」の中にあります。

「栄光 (=グローリア)

いと高きところにいます神にあれ。

地には平和、みこころに適う人々にあれ」

言うまでもなく、これはイエス・キリスト降誕の夜、天使の大軍が歌った讃美です。このうち「みこころ」に適うと訳されたラテン語が「ボランティア」の元になった「ヴォルンタス」です。実は、この箇所は、

平和が「善意」ある人々にあれという別の翻訳も古來あります。多分、「地には平和、ボランティアにあれ」とも読めるでしょう。すると、世界は「ボランティア」(自主的に喜んで善意を実行する人々)によって平和になるという意味になります。

* * *

広義の「ボランティア」は、バッハの森の基本的な理念として、33年前の創設以来守られてきました。世界平和に寄与するためなどと、大風呂敷を広げたわけではありません。「自主的に」「善意をもって」「楽しく」活動するという意味です。「公共の福祉のため」という目的も掲げていません。それは宗教的信仰や政治的信条などと共に、メンバー各人が自主的に決める問題であって、バッハの森としては関わらないという姿勢です。

何と言っても「自主的に」が最も重要な理念です。バッハの森の主な活動は「学ぶ」ことです。その点、学校と同じですが、学校ではありません。学校で学ぶ生徒や学生は、一定のカリキュラムによって知識や技能を身につけ、試験を受けて合格すれば資格が授与されます。確かに学生は自分が興味を持つコースを「自主的に」選べますが、小・中学校は義務教育ですから、生徒が興味のある科目だけ学ぶわけにはいきません。結局、学生にしても、学校で学ぶためには、学びたいことと直接関係のない出席日数など、種々の義務を果たさなければなりません。

それが悪いと言っているわけではありません。ただバッハの森は、もろもろの義務から自由になって各人が「自主的に」学ぶ「学び舎」を目指してきました。出席日数は問題にしませんし、試験も資格授与もありません。入退会も自由です。それで学べるのですか、と疑問に思う方はバッハの森に来てみてください。そもそも学びたいから参加しているわけですから、後は「善意をもって」優先順を決めるだけです。例えば、子育て中の両親には、子どもの運動会がバッハの森に優先するのが当前です。それでも緊急の用事が済むと、皆さんバッハの森に来ます。「楽しく」元気になるためです。公共の福祉と言わなくても、各人が元気になることが大切なのです。これは、賞賛にも感謝にも興味なく、ただ貴い人の命を生かすことに喜びを覚えているボランティアの達人と同じ境地とも言えるでしょう。

(石田友雄)

出会いの感動

私たちの許に留まってください

＊このメディタツィオは、2018年7月22日に開かれた宗教音楽コンサート「出会いの喜び」で朗読されました。

これから演奏するカンタータ：「私たちの許に留まってください」“Bleib bei uns” (BWV 6) は、ライプツィヒ・トマス教会の復活祭第2祝日、すなわち復活祭翌日の月曜日の礼拝で、1725年4月2日に初めて演奏されました。この日の朗読箇所指定されている、ルカによる福音書24章は、復活したイエスとエマオで出会った二人の弟子の物語を伝えています。そのメッセージを、バッハが音楽によって見事に解き明かしたカンタータを、ご一緒に楽しみましょう。

エマオで起きた不思議な物語

この物語によると、エルサレムの西10数キロの小さな村、エマオに向かっていた二人の弟子は、ナザレのイエスは、近い将来、ローマ人占領軍の支配から自分たちを解放してくれるメシアに違いないと期待していました。しかし、イエスは、社会秩序を乱す危険人物として、ユダヤ人共同体の支配者たちに逮捕され、ローマ人知事に告発されると死刑の判決を受け、エルサレム郊外で十字架にかけられ処刑されてしまいました。途方に暮れたイエスの弟子たちは、当局の迫害を恐れて隠れ家に潜伏していましたが、この二人はそこから逃げ出して、エマオに向かっていたのです。イエスが処刑されてから三日目のことです。

エマオに向かう途中、見知らぬ旅人が一緒になり、あなたたちは悲しげな様子で何を語り合っているのか、と聞くので、二人は、メシアと信じていたイエスが呆気なく処刑された上、三日前にご遺体を埋葬した墓を、今朝、訪ねた婦人たちが、ご遺体は見つからないし、イエスは復活したと語る天使のまぼろしを見たと言うので、いよいよ恐ろしくなって逃げて来たのだと語りました。するとその旅人は、あなたたちは何と愚かな人々なのか。これらすべての出来事は、聖書に預言されているのではないかと、詳しく説明し始めたのです。

エマオが近づいても、先に行こうとする旅人を引き止めて、二人が言いました。「留まってください、私たちの許に。はや夕暮れになろうとしていますし、日も傾きましたから」。カンタータの第1曲は、この言葉をそのまま合唱します。彼らの願いを聞き入れて宿

屋に入った旅人は、夕食の席に着くとパンを取り、感謝の祈りを唱え、パンを裂いて彼らに渡しました。すると突然、彼らの眼が開け、この見知らぬ旅人がイエスであることが分かりました。それと同時にイエスの姿は消えました。遺された二人は感動して語り合いました。「あの方が道々聖書を説明してくださったとき、私たちの心は燃えたではないか」。彼らはただちに立ち上がるとエルサレムに戻り、エマオで起こった出来事を仲間の弟子たちに語って聞かせました。

夕暮れが象徴する死

すでに述べたように、カンタータは先ず第1曲の合唱で、この物語から引用した言葉をそのまま「留まってください、私たちの許に。はや夕暮れになろうとしていますし、日も傾きましたから」と歌います。物語同様、この段階では、誰に向かって「留まってください」と願っているのかははっきりしませんが、途中から同行した旅人を引き留める理由として、「夕暮れ」(Abend)になり、日が傾いたからと歌う音楽は、単に下降音形によって日が沈んで行く様子を示すだけでなく、不気味な減音程によって「夕暮れ」「暗闇」そして「死」を象徴しています。それにより「留まってください」と願う相手が、暗闇を照らす光、暗闇を追い払う光、すなわち、死に打ち勝った命、復活したイエスであることを暗示しています。

暗闇を照らす光

更に、今回はオルガンによる器楽伴奏が、全曲を通じて不気味な同音を反復する8分音符を響かせて、ひたひたと迫ってくる夕暮れ、すなわち暗闇の恐ろしさを示しています。このような状況下で、繰り返し歌われる「留まってください」“Bleib bei uns”という願いは、もはや見知らぬ旅人に対する願いではありません。夕食の席で彼がイエスであると初めて分かった物語を先取りして、暗闇を追い払う光であるイエスに対する必死の叫びになっていきます。それは、黙っていたら自分たちを置き去りにして去って行ってしまうイエスを、必死に引き留める叫びに他なりません。

従って、第2曲のアルトのアリアは、留まってくださいと願う相手を、最初から「神の御子」と呼び、迫ってくる暗闇に対して「光」として留まって欲しいと祈ります。第3曲のソプラノのコラールは、更にはっきりと「私たちの許に留まってください、主イエス・キリストよ」と歌い出します。そして、暗闇を照らす「光」、すなわち「御言葉」を私たちの許から消さないでくださいと願います。このようにして、エマオに向かう二人の弟子が道中聞いた、聖書、すなわち、御言葉の解説によって、メシアが十字架で処刑された意味を理解して心が熱くなった物語の意味が解き明かされていくのです。

以上、カンタータ前半の3曲の音楽は、復活したイエス・キリストに、暗闇が迫る時代に彼が信徒と共に留まり、御言葉の光によって照らしてくださることを願います。これに対して、カンタータ後半は先ず第4曲のバスのレチタティーヴォが、世界中にはびこる暗闇がどこから来たのかと問いかけ、それは自分たち信徒が正しく歩まないため、神御自らが光を消したからだと説明します。このような厳しい反省の上に、第5曲のテノールのアリアが「イエスよ」と呼びかけ、自分たちが罪の道を歩まないように、御言葉の光を輝かせてくださいと願います。この曲は、「イエスよ」「Jesu」と歌い出すテノールと同じモチーフの器楽前奏で始まりますが、このモチーフは、「ト - ニ - 変ロ - 嬰へ」の四音からなり、最初の2音と後の2音を作る交差から「クロイツ」（十字架）を表す音形になっています。従って、十字架上のイエスを仰ぎ見て歩むことができるようにという願いであり、それが、復活したイエスに留まってくださいと願う信徒の生き方なのだと語っているのです。最後に第6曲のコラールが、暗闇、死、罪など、暗黒の力に打ち勝って復活したイエス・キリストに護られ、永遠に彼を誉め称える喜びが与えられることを祈ってカンタータは終わります。

復活したイエスとの出会い

この物語と音楽は何を伝えているのでしょうか。ナザレのイエスが極悪人として十字架にはりつけにされて処刑されたとき、彼をメシアと信じて集まっていた人々が希望を失い、今後どうしたらいいか分からなくなったことは想像するに難くありません。通例なら、このようなグループは、この時点で四散してすべてが終わったでしょう。しかし、この人たちが始めたキリスト教は300年後にローマ帝国の国教になり、キリスト教文化は、その後の世界に大きな影響を及ぼしてきました。この大逆転はどのようにして起こったのでしょうか。

エルサレムを逃げ出した二人が逃亡を止めてエルサレムの仲間の所に戻ったきっかけは、「復活したイエスに出会ったため」でした。エマオに向かう途中から道連れになった見知らぬ旅人が、夕食の席でイエスだと分かった途端、姿を消したというエピソードは、確かに神秘的な雰囲気包まれています。物語をよく読んでみると、これが単なる超常現象の報告ではないことが分かります。二人は、道連れになった旅人から、エルサレムで起こった事件の意味を聖書の解説によって説明されたことを思いだして、あのとき私たちの心は燃えたのではないかと語り合っています。そして、イエスが十字架で処刑されたのは、キリストが受けるべき苦しみであったと理解したとき、元気を取り戻してエルサレムに戻りました。

このように、聖書を新しく解釈することによって、死んだイエスの思いと行動の本当の意味を知ったこ

とを、「復活したイエスと出会った」と表現したのではないのでしょうか。このような出会いに心が燃え、感動を覚えた人々がキリスト教を生み出したのです。

命が命を生かす

では、メシアが、救いを全うするために受けるべき苦しみとはどういうことなのでしょう。それも彼らは聖書の中に見つけました。すなわち、選民イスラエルの先祖が奴隷にされていたエジプトを脱出したとき、神に命じられて小羊の血を入り口の扉に塗っておくと、その血を目印に死が過ぎ越していったという故事です。イエスが十字架上で血を流したのは、この小羊のように、自分が犠牲になって人の命を救う手本になるためだったと考え、イエスを神に捧げられた小羊、すなわち「神の小羊」と呼びました。ラテン語で「アニュス・デイ」と言います。この信仰には、一つの命を生かすものはもう一つの命であるという、普遍的な真理が含まれています。現代人は食物連鎖という説明で、命が命を生かす自然界の法則として理解しますが、古代人は、一つの命が生きたためにもう一つの命の犠牲が必要だということを、神秘的な事実として厳粛に受け止めていたのです。

キリスト教は、古代イスラエルの歴史に基づいて編纂された書物である聖書を原点として、ヨーロッパに広がっていった独特の歴史を持つ宗教ですが、この宗教が生み出した文化は、人間存在に関する深い洞察と、人間の命を最も大切なものとする普遍的な価値観のゆえに、広く世界中の人々からも受け入れられてきました。その原点となった、2000年前にエマオで起きた出会いの喜びと感動を、今日、バッハの音楽を通して私たちも味わうことができれば、これほど嬉しいことはございません。

(石田友雄)



楽しかった夏

バッハの森に集まった皆さんの声

本当に有り難う、皆さん！

ヤン・マイより

2018年8月18日

友雄さん、友人の皆さん！

シュヴェリンに帰って来てから2週間たち、皆さんのことを考えています。私たちは、皆さんのおもてなし、沢山の話し合い、古いきずなの再確認に圧倒されました。私たちが10年、いやもっと会わなかったとは、誰も思えませんでした。と言うわけで、本当に有り難う、友雄！ 本当に有り難う、皆さん！

私たちは、バッハの森の活動が相変わらず盛んなことが嬉しく、特にクワイア（合唱団）が大変安定した規模で活動していることは素晴らしいと思いました。それに加えて、皆さんは、ハンドベル・クワイア、子どもたちの新しいハンドベル・グループ、セミナー、とりわけオルガン音楽の研究と演奏を楽しみ、力を注いでいらっしゃいます。

日本の旅行では、下田の南の村の海辺で1週間、のんびり過ごしました。バッハの命日とヤンの誕生日（7月28日）に台風が来ましたが、大丈夫でした。それから行った京都は、いつも通り印象深いところでした。ただし暑かった！

シュヴェリンでは、ここ数週間、大聖堂のオルガン建造者、フリートリヒ・ラーデガストの生誕200年をお祝いしています。先日、1871年10月に大聖堂で開かれた最初のコンサートのプログラムを再現しました。今週、大聖堂のクワイア（聖歌隊）の練習が再開します。

友雄さん、これからもお元気にお仕事をなさることを願っております。

皆さんに心よりご挨拶いたします。

ヤン、マインデルト

* * *

「出会いの喜び」を得ました

バッハの森が誕生する前から、聖書の国資料館が整備された頃まで、親しく通わせていただいたこの場所

に、そこで出会った「ヤン・マイ」こと、ヤンとメイ
ンデルト（オランダ語読み）と一緒に訪れることが
でき、本当に久しぶりに3日間、嬉しく、豊かな時を
得ました。

私もコンサートの合唱に参加させていただきました
が、パレストリーナの「ミサ・ブレヴィス」もバッ
ハのカンタータ「私たちの許に留まってください」
（BWV 6）も、前にバッハの森で一緒にした世界でし
た。特にバッハのカンタータは、1994年4月に使用し
た楽譜も見つかり、ひととき感慨深いものがありまし
た。

日曜日に帰宅する途中、何故か「ミサ・ブレヴィス」
の「あなたのみが聖なる方ですから。あなたのみが主
です。あなたのみがいと高き方です」のアルトの旋律
が頭をめぐり、歌いながら運転するはめになりました。
ミサ曲は元来「ことばの世界」が主になりますが、「音
の世界」が二人三脚で力強い世界を構築していますよ
ね。「ことば」の重みが段々と消えて行った歴史もむ
べなるかな、と思いました。

バッハの森のコンサートは、バッハが務めていたル
ター派というキリスト教のグループの礼拝の枠に入
っており、今回も「今、ここに」の要素が豊かに詰ま
っており、枠自体が生き生きとしておりました。プロ
グラムの初め、オルガンの前奏に続いて、1534年のル
ター訳の日本語訳で朗読された詩篇62篇も、今、日
本に生きる私たちに重く鋭く入ってきました。まさに
崩れ落ちていく今の日本の実情を思われ、それを私
たちがどう理解するのか要請されてコンサートは始
まりました。

人が歳を重ねると、日常生活にさまざまな困難も加
わりますが、他方、この地上で生きた日々が長くなれ
ばなるほど、以前よりいろいろな言葉が意味を持っ
て入ってくる有り難さもあるものだと思感したコン
サートでした。歌い終わった瞬間は、ゲーテの「ファ
ウスト」ではありませんが、「この時よ、止まれ、永
遠に！」といった風情でした。その後でオルガンの
後奏とハンドベルの点鐘があり、やっと日常生活へ戻
りましたから、この枠は良く整えられているのだなと
思いました。枠の中の中身が豊かに表現されることが
前提ですが。まさしく「出会いの喜び」を得ました。
有り難うございました。演奏に加え、準備・運営を担
われた方々に感謝申し上げます。こうした活動のため
の公的な助成が豊かになり、心ある方々の負担が軽減
される国へと変わって行きますように！（菊地純子）



ヤンさん、マインデルトさん 「私たちの許に留まってください」

春のシーズンの終わり頃、今年の夏、ヤンさんとマインデルトさんが10年ぶりに来訪され、一緒に音楽できるというお知らせがありました。全く予期していなかったことなので、皆、大喜びしてその日を待つ思いと共に、お二人と一緒に演奏したカンタータなどの思い出を、合唱やハンドベルの練習の後で語り合いました。

それと同時に、いろいろな事情から最近バッハの森の活動に参加していなかった旧来の仲間が、これを契機に多く集まってきてくださったことは、大きな喜びでした。それは、コンサートを成功に導く一つの原動力になりました。

ヤンさんとマインデルトさんが、毎年のように来訪してくださったところは、5月の連休にワークショップを開くのが恒例で、合唱の他に声楽やオルガンのクラスもあって、たつぷりと時間を使って音楽を楽しみました。ヤンさんの優雅な指揮で、普段できない演奏を軽々とこなしたことを覚えています。マインデルトさんの声楽指導と、奏楽堂の空間を自在に使いこなした演奏によって、ワークショップのまとめとしてのコンサートは、いつも輝かしいものになりました。

今回は、以前のように何回もリハーサルを重ね、贅沢にゆっくりと音楽をすることはできませんでした。ゲネプロを兼ねたワークショップを1回開き、その翌日、コンサートで演奏するという駆け足のスケジュールでした。演奏したカンタータが、「私たちの許に留まってください」「Bleib bei uns」(BWV 6)であったことは、お二人にもっと留まっていたいてより深く濃密な時間を過ごしたいという私たちの気持ちを伝えているように感じました。実際、今年も信じられないくらい素敵なコンサートでした。

ヤンさんとマインデルトさんは、いつも朗らかでしたが、音楽をするときは、朗らかであると同時に、言い表わしがたい動きと調和と緊張を伝えてくださいました。リハーサルの後の夕方、昼間の暑さが夕涼みできるほどになると、お二人は、つくばの田園の散歩に出かけていました。その後ろ姿が何となく忘れられません。

お二人と過ごしたワークショップとコンサートの日々から一ヶ月あまり過ぎました。今、私たちは、お二人が元気に過ごしておられることと、近いうちにまたお会いできる日が訪れることを願っています。

(熊谷徹)

* * *

思いを共有し共に楽しむために

ヤンさんとマインデルトさんを講師に迎えて、7月20日(金)の午後3時~5時に、オルガン音楽ワークショップ「コラールの伴奏とイントネーション」が開かれました。参加者は10人と少数でしたが、大変多くのことを学べる楽しいワークショップでした。

初めにヤンさんが、ルターが始めた礼拝における会衆のコラール斉唱は、最初、楽器の伴奏なしで行われたと、コラールの斉唱とその伴奏の変遷について話してくださいました。そして、オルガン伴奏がつけられるようになったのは、北ドイツで100年後、南ドイツでは200年後のことであり、その目的は会衆にコラールを良く歌わせることであつたと説明されました。ですから、コラール伴奏をするオルガニストが決して忘れてはならないことは、1) テンポ、2) フレーズを作る、3) ストップの選択だと、実際的なことを教えてくださいました。

続いて、マインデルトさんによるコラール歌唱の指導は、先ず体をリラックスさせ、息をしっかりと吸ってゆっくり吐く呼吸をしてから、息に乗せて声を出すように段階的に準備を整え、最初は短いフレーズで歌い、次第に長いフレーズに続け、最後に終着点を意識して歌うというものでした。

課題コラールは次の4曲でした。

「いと高き神に」“Allein Gott in der Höh sei Ehr”
「いざ来たれ、主よ」“Nun komm, der Heiden Heiland”
「主は死につなぐれ」“Christ lag in Todesbanden”
「ああ主よ、我らの許に留まりて」“Ach bleib bei uns”

そして準備をしてきた4人の受講生が、次々と公開レッスンを受けた。当然、受講生の伴奏により、みんなでコラールを斉唱しました。

私はレッスンで、特にフレーズのつなぎ方、次の節へのつなぎ方など、オルガンの演奏に際してどのような息のつき方をしたらいいか、また曲想を作るストップの選び方などのご指導を受けました。そして、会衆の皆さんが良く歌えるように、コラールに込められた思いを共有し、共に味わい共に楽しむ伴奏を目指すよう教えていただきました。

なお、オルガンの側には宮本とも子先生がいて、ヤンさんが話すことを通訳してマイクで会場の皆さんに伝えてくださり、オルガンの下では菊地純子さんが、ヤンさんとマインデルトさんのお話しを通訳してくださったので、すべてがとてもよく分かりました。助けてくださったお二人に感謝いたします。

(安西文子)

* * *

自然の流れが大切

コラールのイントネーションは、オルガニストがその都度、自分で作らなければなりません。当番になったとき、いつも頭を痛めている問題です。今回、ヤンさんから、コラールの始めと終わりを合わせるだけでは不自然だから、その間に経過音を入れて自然の流れを作り、リズムを確保することを教えていただきました。教えていただいたことが実行できるよう、努力してまいります。

(笠間きよ子)

* * *

懇切丁寧なご指導に感謝

オルガンを弾き始めてまだ日が浅い私が公開レッスンを受けてもいいのかと困惑しながら、課題曲の練習を始めたのは7月に入ってからでした。伴奏譜は直前の「コラールとカンタータ」で使用したものを手直しし、イントネーションについては作り方も知らず途方に暮れましたが、オルガン・クラブの方々の助言や、金谷さんが貸してくださった、昔の講習会のためにヤンさんが作成した資料のお陰で、何とか形にすることができました。

ワークショップの前の週には、比留間恵さんが指導してくださって、課題コラールをドイツ語で何度も歌いました。普段、日本語訳で歌っているコラールが、ドイツ語で歌うと、旋律が言葉のアクセントと一致していることや、韻を踏んでいる歌詞の構成なども明確になり、曲の本来の姿が良く見えてきました。

ワークショップの前日には、明治学院大学のチャペルで行われた、ヤンさんとマインデルトさんのコンサートに行き、ヤンさんのオルガン演奏を会場に設置されたモニターで見ることができました。ゆったりと腕を前方に伸ばし、体には無駄な動きがなく、残響が少ない会場にもかかわらず、繊細な音楽を完全にコントロールした素晴らしい演奏でした。

残響と言えば、バッハの森奏楽堂の美しい響きは、他と比べて恵まれていると思いますが、ヤンさんはこれでもドライだ（短い）とおっしゃっていました。シュヴェリン大聖堂の残響は6秒もあるから難しい。特にバッハは和声が次々と変わるので、非常にゆっくりと演奏しなければ全ての音が混ざってしまう。あのような大聖堂に一番向いているのはグレゴリオ聖歌だ、というお話も興味深くうかがいました。

さて、レッスンで教えていただいたことをまとめると次のようになります。1) 会衆の歌声に伴奏を合わせるとどんどんテンポが遅くなるから、合わせるのではなくリードすることが必要。2) 息継ぎの前の音を短めに切り上げる。3) 二分音符などの長音が短くなりがち。アウフタクトの音の長さを正確にとるとリズムが狂わない。4) 各節ごとにストップや使用鍵盤を工夫して音色を変えるといい。ただし、できるだけシンプルな操作や鍵盤移動で済むように。5) イントネーションは、コラールの曲想のエッセンスを盛り込むように作る。

第1節をドイツ語で歌い終わると、ヤンさんは、とてもきれいな発音で日本語の続きを歌ってくださいました。最後に、私が四苦八苦している様子に、オルガンを始めてどのくらいになるのか？と聞かれ、まだ3ヶ月ほどですと答えると驚いておられましたが、初心者のわりには頑張りましたね、と慰めていただき恐縮しました。講習会の終わりにヤンさんが演奏してくださったコラールのイントネーションは、とても即興とは思えない、前奏曲のような響きをしていました。

今回、ご指導をいただいた先生方や運営に携わってくださった皆様、本当に有り難うございました。

(並木聡子)



楽しかった発表会

発表会の時、ぼくはとてもきんちょうして心ぞうがドキドキしていました。発表会の前の日の夜は、「のばら」のきょくをなぜかわすれてしまい、うまくできるきかドキドキしていました。発表会では、練習で先生に教えてもらったことを思い出して、がんばりました。終わってからも、少し心ぞうがドキドキしていました。みんなにはく手してもらって、とてもうれしかったです。

先生たちも合しょうをしたり、ハンドベルの発表をしました。高い声のひと、ひくい声の人の声が一つになって、とてもすてきな音だなと思いました。ハンドベルは、かんたんだけど、むずかしいです。ぼくのハンドベルの音だけだと、きょくにはなりません。でも、みんなの音と合わせると、すてきな音のきょくになります。みんなと練習をがんばって、次の発表会もがんばりたいです。（森かいじろう・小学3年生）

* * *

息子が天使に見える

バッハの森で小5の長男の姿に癒やされる瞬間があります。家では、私と戦う反抗期真っ盛りの息子とは思えない姿。怪獣のように暴れる息子に、鬼のように怒鳴る母。恥ずかしながら、我が家の毎日、天使にお目にかかるのは、寝顔を覗いたときぐらいです。

息子がハンドベルを始めてからもうすぐ1年。なぜ、投げ出さずに健気に練習を続けられるのだろう。なぜ、月に1回だけの練習で、あんなに素敵な曲に仕上がるのだろう。しかも途中から入ったお友達も、あつとい

う間に溶け込み追いついてしまう。不思議です。

一生懸命、お友達の音を聞き、息を合わせ、素敵な音色を奏でようとする息子。ベルそのものが上等で、良い音色が出やすいこともあるでしょう。でも、それだけではありません。

それは、先生方が子どもたちを上手に褒めて、その子の力を引き出し、次のステップへ導いてくださるからです。「今の瑠一郎君の音、とてもよかったです！」など、たくさんの褒め言葉をかけてくれます。日々、息子の良くない点をたくさん指摘している私とは正反対。気の散りやすい息子が、集中モードに入り、天使のような穏やかな表情で演奏できるのは、優しく丁寧に、そして根気強く教えてくださる先生方のおかげです。

曲の歌詞の意味も、子どもたちにわかりやすい言葉で説明してくれたり、曲の時代背景や歌詞の意味なども教えてくださるので、どんな曲かをイメージしながら演奏できるのも、ありがたいことです。

ハンドベルは、誰か一人でも欠けたら曲になりません。そして、誰か一人だけが目立っても良い演奏にはなりません。お互いの音色を聞き合い、振る姿を見ながら、曲のテンポやタイミングをつかみます。欠けては困る大切な一人一人が集まって、一つの曲を作り上げる喜びがあります。息を吸うのを合図に曲をスタートさせ、お互いを見合わせてベルの響きを体で止めて曲を終わらせる。見事なチームワークです。

スポーツが苦手、加えて反抗期の息子。母としては、男の子なのだから、何かスポーツで体力をつけ、協調性を身に着けてほしいと勝手に思い、あれこれ誘ってみても全く首を縦には振りません。ですが、ハンドベルを通してこの1年、息子は自然とお友達と協力する心が芽生えてきたように感じます。

曲が仕上がるごとに、コンサートで披露する機会があるのも、晴れ舞台の息子を見られる嬉しいイベントです。聴いてくださる方々に届くように頑張ろうとする緊張感、あたたかい拍手・・・と、貴重な体験をさせていただいています。そして、プログラムの中で、プロの方々の素晴らしい歌や演奏が聴けるのも、毎回とても楽しみにしています。

練習を見ていると、バッハの森に集うすべての人たちが「静謐な中にある不思議な力」に包まれ、守られているような気がします。ハンドベルを通して、子どもたちが、音楽だけでなく、たくさんのことを学び、天使のような純粋さを持ち続けながら、素敵な大人に成長してほしいと願っています。（佐藤恭子）

7. 5, 12, 19, 26 運営委員会 参加者 4, 5, 5, 4 名。
 7. 13 ワークショップ打ち合わせ 参加者 5 名。
 草取り (中庭) 参加者 2 名。
 7. 14 総練習 (夏休みの音楽会) 参加者 15 名。
 7. 20 到着 ヤン・エルンスト氏、マインデルト・ツヴァルト氏。
 オルガン音楽ワークショップ 「コラールの伴奏とイントネーション」 参加者 15 名。
 7. 21 ワークショップ、ゲネプロ 参加者 31 名。
 7. 22 宗教音楽コンサート 参加者 81 名。
 7. 23 出発 ヤン・エルンスト氏、マインデルト・ツヴァルト氏。
 7. 30 白アリ駆除 (資料館) ニットウ工業
 来訪「岩村かおるフォルテピアノ・リサイタル」打ち合わせ 2 名。
 8. 4 会場設定 (夏休みの音楽会) 参加者 11 名。
 8. 6 白アリ駆除 (資料館) ニットウ工業
 8. 7 草取り、剪定 (外周) 参加者 2 名。
 8. 16 運営委員会 参加者 5 名。
 8. 17 草取り、芝刈り (中庭)、草取り、剪定 (外周) 参加者 4 名。
 8. 19 夏休みの音楽会 参加者 51 名。
 8. 20～9. 2 夏期休館
 8. 24 エアコン取り付け (セミナーホール)
 9. 1 楽譜整理 参加者 1 名。
 9. 6, 13, 20, 27 運営委員会 参加者 4, 4, 4, 5 名。
 9. 7 草取り (中庭) 参加者 2 名。
 9. 8 秋のシーズン開始
 ヴォイストレーニング入門「声を出す楽しみ、声を合わせる喜び」参加者 12 名。
 イタリア・オルガン見学会 参加者 4 名。
 9. 12 来訪 中悦子氏 (フォトグラファー)
 9. 28 草取り (中庭) 参加者 2 名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ研究

コラールとカンタータ (JSB)

9. 15 第 438 回、三位一体後第 8 主日のカンタータ
 「お前に告げられている、人よ、何が善なのか」
 (BWV 45) ; コラール「善き御神よ、すべての泉」。
 オルガン : M. レーガー「おお神よ、あなた、善き御神よ」 Op. 67/30) 並木聡子。参加者 12 名。
 9. 22 三位一体後第 10 主日のカンタータ「しかし眼をとめて見よ、このような痛みがあったか」
 (BWV 46) ; コラール「大いなる主、力の神」
 オルガン : J. S. バッハ「おお、偉大な誠実な神よ」 (BWV 46/6) 海東俊恵。参加者 10 名。
 9. 29 第 439 回、オルガン : S. シャイト「おお、偉大な力の神」海東俊恵。参加者 10 名。

学習コース

- バッハの森・クワイア (混声合唱) 7. 7/21 名、7. 14/21 名、9. 15/14 名、9. 22/14 名、9. 29/11 名。
 オルガン音楽研究会 9. 21 /8 名。
 コラール研究会 9. 14/6 名、9. 21/7 名。
 クラヴィコード・オルガン教室 7. 28/2 名、9. 21/2 名。
 オルガン・クラブ 7. 13/5 名、9. 14/3 名、9. 28/2 名。
 ハンドベル・クワイア 7. 14/6 名、7. 28/6 名、8. 4/7 名、9. 29/5 名。
 声楽アンサンブル 7. 7/6 名、7. 28/6 名、8. 4/8 名。
 器楽アンサンブル 7. 7/5 名、7. 28/4 名、8. 11/4 名、9. 29/4 名。
 読書会 : 聖書 9. 15/5 名、9. 22/6 名、9. 29/5 名。
 ハンドベル・リンガーズ (小学生のハンドベル・クラブ) 7. 29/8 名+7 名、9. 16/8 名+1 名。
 オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習
 7. 3/1 名、7. 4/2 名、7. 5/1 名、7. 6/4 名、7. 7/1 名、7. 10/2 名、7. 11/2 名、7. 12/2 名、7. 13/3 名、7. 14/1 名、7. 17/2 名、7. 18/1 名、7. 19/1 名、7. 20/1 名、7. 26/1 名、8. 1/1 名、8. 2/2 名、8. 3/2 名、8. 4/2 名、8. 7/1 名、8. 8/1 名、8. 9/1 名、8. 10/2 名、8. 11/2 名、8. 14/1 名、8. 16/1 名、8. 17/2 名、8. 18/3 名、9. 4 /2 名、9. 6/2 名、9. 7/3 名、9. 8/1 名、9. 11/2 名、9. 12/1 名、9. 14/1 名、9. 15/2 名、9. 18/1 名、9. 19/1 名、9. 20/2 名、9. 21/1 名、9. 22/2 名、9. 25/2 名、9. 27/1 名、9. 28/2 名、9. 29/1 名。